

RAFミュージアム を征く



ロンドン北西部のヘンドン地区。シティへの通勤にも便利
なため、フィンチリーやゴールドズ・グリーンなどと並び
日本人も多く暮らす地域だ。十一世紀後半に作られた土地台
帳「ドウムズデイ・ブック」にも Hendon という名で登場
しており、「一番高い丘にて」という意味だという。
基本的には住宅街として認識されている方も多いかと思
う。そのヘンドン地区のグリーンデルになぜか、往年の戦闘
機や爆撃機など、百機を超えるコレクションを誇る、英国随
一の航空博物館「RAFミュージアム」がある。RAFとは
The Royal Air Force の略で、「王立空軍」という意味だが、もっ
と分かりやすく言えば「英国空軍」のことである。
さらにそこにはスピットファイアやメッサーシュミット、
P-51マスタングなど、第二次世界大戦時の欧米の名機に混
じって、日本の「五式戦闘機」(後述)が地球上で唯一、ほぼ
完璧な状態で保存、展示されている。
一体なぜ、住宅街の一角に空軍の博物館が置かれているの
だろうか。その理由を知るためには、今からちょうど百年程
前に、この地を拠点に活躍した、一人の英国人青年のことに
触れなくてはならない。

ヘンドンに飛行場を作った男

この青年の名はクロード・グレாம்・ホワイト (Claude
Graham-White 一八七九—一九五九)。サウサンプトン生ま
れの英国人だ。

グレாம்・ホワイトは十代の頃より、ヨットや自動車など
風を切って疾走する乗り物を愛する若者であった。一九〇三
年、ライト兄弟が動力付き飛行機の初フライトに成功したと
の報に触れるや否や、彼の情熱は一気に飛行機へと向かうこ
ととなる。そして航空産業では英国に先んじていたフランス
に渡り、飛行ライセンスを取得。さらに一九一〇年、英国で
も飛行ライセンスを獲得し、英国人としては六番目の有資格
パイロットとなった。

その後、高額な賞金が掛かった飛行レースに参加するだけ
でなく、フランスで経営を始めたフライトスクールも軌道に
乗せ、当時まだ人々の目には新鮮だった空飛ぶ物体を武器に
富を蓄えていく。

そして一九一一年、グレாம்・ホワイトはヘンドンに約二
百エーカー(約〇・八一平方キロ)の土地を買い、ここにロ
ンドンで初となるヘンドン飛行場 (Hendon Aerodrome) を

建設。同所にフライト

スクール、並びに航空

機製造会社を設立し、

フランス製の機体をラ
イセンス生産するのみ
ならず、自らも飛行機
を設計し、実際に製作
しては飛ばし始めるの
である。



一九二二年ごろのグレாம்・ホワイト



ホームズのハリケーンによって胴体部分を切断され、まっ逆さまに墜落するドルニエDo17。ロンドン市民によって偶然撮影された、貴重な一枚だ。



ドイツ空軍の爆撃機、ドルニエDo17。もともとは高速郵便配達機として製作された。細長い胴体から「空飛ぶ鉛筆」と呼ばれていた。

敵爆撃機のロンドン侵入を懸命に阻止していたホームズたちであったが、十二時十五分、バタシー上空付近で二機の双発爆撃機、ドルニエDo17に防衛ラインを突破されてしまう。ホームズはハリケーンの機首を反転させ即座にこれを追尾。彼の目の前を行くドルニエに機銃の照準をピタリと合わせた。だが次の瞬間、ホームズの目に飛び込んできた光景に、操縦桿を持つ彼の手が震えた。

敵爆撃機が目指していたのは、バツキンガム宮殿であった。ホームズは機銃の発射ボタンをめり込むほど押し続けた。しかし、弾丸はすでにそれまでの戦闘で撃ち尽くされており、彼のハリケーンは戦闘機としての役目をほぼ終えていた。どうする……

ドルニエは刻一刻とバツキンガム宮殿に接近して行く。「王立空軍」の若きパイロットは覚悟を決めた。操縦桿をグツと引き、ハリケーンの高さを上げながら敵機を追い越して反転。そして今度は操縦桿を一気に押し下げ、敵爆撃機に向けて急降下した。

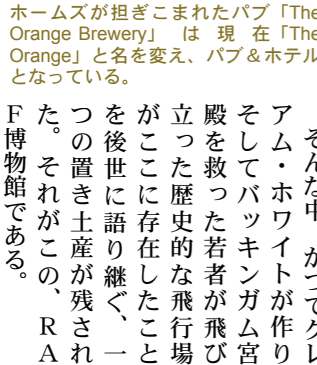
トで無事、降り立ったホームズ。体当たりしてまで宮殿を守ったヒーローを市民が放つておくはずもない。ホームズはそのまま百ヤード先にあった「オレンジ・ブルワリー」というパブ（現存）に担ぎ込まれ、ブランデーを振舞われた。その後、チェルシーパラック（兵舎・これも現存）の医師によって簡単な治療を受けた後、タクシーを拾って第五〇四飛行中隊へと戻った。タクシーが向かった先、それはロンドンであった。そう、第五〇四飛行中隊は、グレアム・ホワイトが作ったロンドン飛行場を基地としていたのである。

その日から六十四年の歳月を経て、ホームズはかつて愛機に積まれていたエンジンと、奇跡的な対面を果たした。

まるで王守守護の命を受けて地上に送られたかのようなこの老人は、エンジンとの再会からわずか一年後の二〇〇五年六月、青雲を切り裂いて上昇するハリケーンのように、神のもとへ召されていった。享年九〇。

バトル・オブ・ブリテンの終るとともに、ロンドン飛行場の航空基地としての役割はほぼ終了する。滑走路がスピットファイアなど新鋭戦闘機の離発着には短くなったため、その後は主に物資の輸送センターの使われ方がなされてきたが一九五七年、飛行場はわずかな敷地を残して民間に払い下げられ、宅地化されたり、警察学校が置かれたりするなど、徐々に消滅の方向へと向かっていく。

この体当たり劇は多くの市民によって地上から目撃され、墜落現場の写真も撮影されていた。その写真を元に、先のチャネル5の番組が墜落位置をピンポイントで探り当て、今回のエンジン発掘となった。パラシュー



ホームズが担ぎこまれたパブ「The Orange Brewery」は現在「The Orange」と名を変え、パブ&ホテルとなっている。

あなたのブログをジャーニーのホームページにリンクしませんか？

個人ブログ大募集!!

インターネット・ジャーニー

現在、インターネット・ジャーニーへのアクセス数は月平均約11万。あなたが発信している英国での生活に関するブログを、今よりちょっぴり多くの方にご覧いただくためのお手伝いができるかもしれません。営利を目的としない個人のブログであれば、リンクはもちろん無料です。お申し込みはインターネット・ジャーニー「個人ブログの部屋」をご覧ください。

※掲載にあたり、事前に一定の審査をさせていただきます。内容によってはリンクをお断りしなければならない場合もございます。予めご了承ください。

www.japanjournals.com



第二次世界大戦当時のヘンドン飛行場。風向きによって3本の滑走路が使い分けられていた。



グレアム・ホワイト工場で試作されたボックスカイト機

軍部の一方的な決定に憤慨し、徹底抗戦を誓ったグレアム・ホワイトであったが、彼を待ち受けていたのは、長く、醜い法廷闘争であった。しかし、国防を楯に立ち、はだかる強大な軍部の前に彼はあまりにも小さな存在でしかない。一九二五年、グレアム・ホワイトは、わずかな賠償金と引き換えにヘンドン飛行場を譲り、失意と憤怒の中、この地を後にした。

一九三九年九月にドイツがポーランドに侵攻して始まった第二次世界大戦。ドイツ軍は

彼こそが発掘されたエンジンを搭載したハリケーンを操縦していた人物であり、彼にとつては六十四年ぶりの愛機の心臓部との再会であった。

バトル・オブ・ブリテン最後の大規模な空襲となった九月十五日。先述のように標的となったのはロンドンだった。この日はドイツ空軍の攻撃が朝から始まり、ロンドン近郊の飛行場から飛行可能な戦闘機全機が出撃、上空で敵機の襲来を待ち受けていた。この時、二十二歳



ホームズが愛機、ハリケーン（同型）。機体はまだ金属と木材、帆布を併用した旧式ではあったが、スピットファイアがフル生産となるまで、大活躍した。

一九一八年四月。戦時下に陸軍航空隊と海軍航空隊が融合して独立、世界初の空軍となる英国空軍RAFが誕生していた。英国空軍はヘンドン飛行場を警告なしに接収、つまりグレアム・ホワイトから取り上げ、空軍基地とする決定を下すのである。

一九〇四年五月、チャネル5の『The Search for the Lost Fighter Plane』(失われた戦闘機を探して)という番組が、歴史的瞬間となる映像を捉え、それを全国に生中継してみせた。撮影現場はロンドンのバツキンガム・パレス・ロードの一角。金属探知機の反応を頼りに、重機が路面を掘っていく。数メートル掘ったところで現れたのはロールスロイスの文字の一部が残る、戦闘機のエンジンであった。操縦桿も同時に発見され、驚いたことに機銃を発射するボタンは「FIRE」、つまり発射状態のままになっていた。

一九四〇年七月十日以降、ドイツ空軍は英国南岸部の飛行場や軍施設の他、ドーバー海峡、英国海峡を往來する船舶や艦船などへの攻撃を開始。英国空軍はこの迎撃に大忙しとなった。

ドイツ空軍の作戦は徹底しており、爆撃機とそれを援護する戦闘機は時に千機を超え、まさに大空を黒く染めるかの勢いで英国南岸部へと襲いかかり、英国側に甚大な損害を与えていた。

若者たちは、怒涛のごとく押し寄せるドイツ空軍の爆撃機が、ロンドン市内に爆弾をばらまく前に撃ち落とすという、単純明快、かつ困難な任務に熱中していた。その中に、フライトスクールの卒業生、第五〇四飛行中隊に配属されたばかりの、まだ表情に幼さすら残るレイ・ホームズ軍曹がいた。この時、二十二歳

ヘンドン飛行場では頻りに航空ショーが催され、物珍しさもあって、多くの観衆を集めることになった。こうしたショーではのべ五十万人もの観衆を集め、当時はアスコット、エプソンの競馬に並ぶ重要な催し物と評されるほどであったという。

経営のフライトスクールを徴用する。それでも尚、グレアム・ホワイトは、ドイツ軍の飛行船の警戒任務にあたるなどするほか、世界で初めてパラシュート降下も成功させるなど、戦時下における飛行機の有益性を訴え続けていた。

二〇〇四年五月、チャネル5の『The Search for the Lost Fighter Plane』(失われた戦闘機を探して)という番組が、歴史的瞬間となる映像を捉え、それを全国に生中継してみせた。撮影現場はロンドンのバツキンガム・パレス・ロードの一角。金属探知機の反応を頼りに、重機が路面を掘っていく。数メートル掘ったところで現れたのはロールスロイスの文字の一部が残る、戦闘機のエンジンであった。操縦桿も同時に発見され、驚いたことに機銃を発射するボタンは「FIRE」、つまり発射状態のままになっていた。

翌一九四〇年五月には西方電撃戦を開始し、わずか一月ほどでフランス、ベルギー、オランダを降伏させることに成功。これによりドイツの次なる敵は英国に絞られた。ドイツは英国を屈服させるため、英国本土への陸上作戦（通称アシカ作戦）を計画。大量の兵士を英国本土に上陸させるためには、兵力の海上輸送を邪魔するであろう英軍の航空戦力を先に取り除いておく必要があった。

ヒトラーはこれに激怒した。報復の報復として九月七日と十日、五日、いずれも千機を超え、大編隊をロンドン上空襲撃に動かされた。英国側も二十二個飛行隊から全機を出撃させ、ロンドン上空で激しい戦闘が展開された。しかし、損害が激しい上に期待したほどの戦果も上げられず、遂に英国本土上陸作戦は無期延期を決定。その後、散発的な小競り合いは続くが、十月三十一日の攻撃を最後に、作戦はほぼ終了した。これが、後に言われる有名なバトル・オブ・ブリテンであり、大戦の行方を決定する重要な転機になったとされる。



ドイツ空軍の空襲により、被害を受けたロンドン市内

